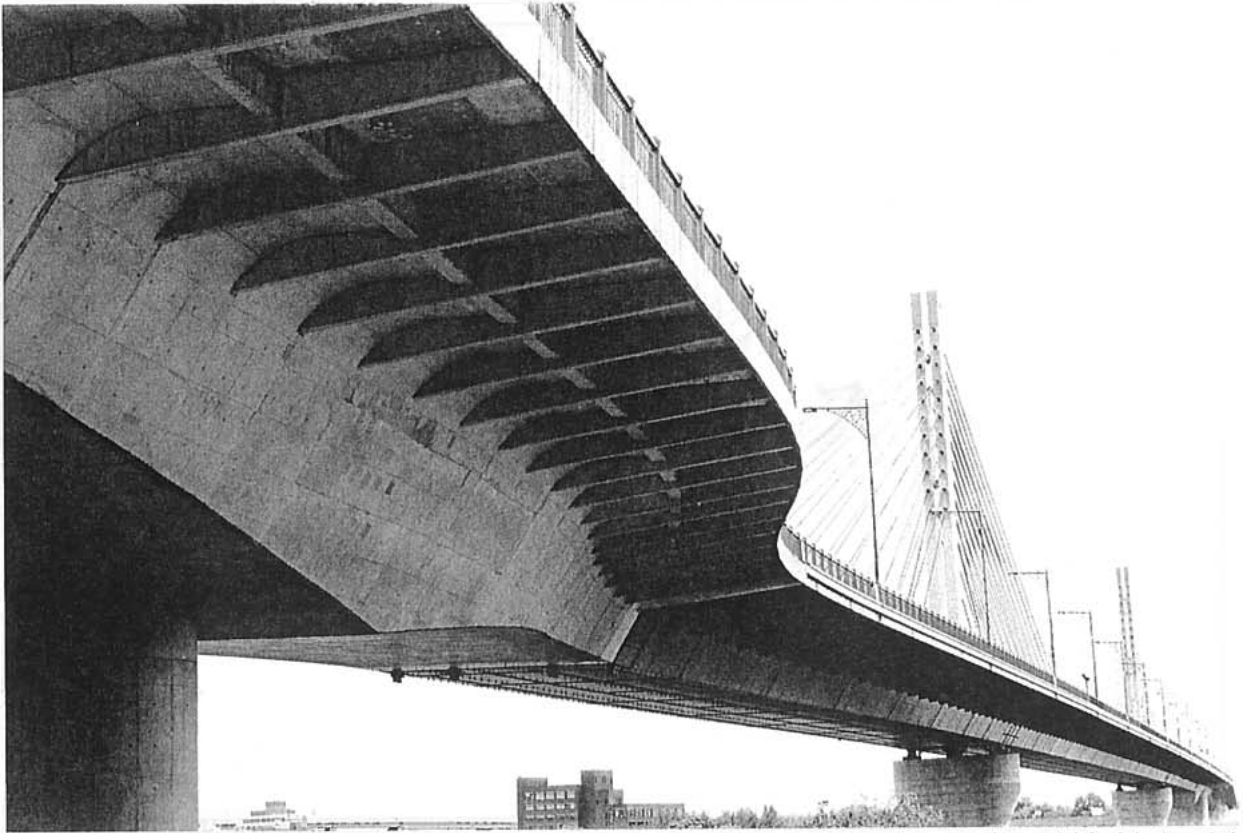


『架ける』

“さいきょう会ねっとわーく”

創刊号 Vol.1 1996.7



写真：鋼斜張橋とPC橋の結婚（本多 新）

「架ける」にかけて

平成3年3月7日、小生退官記念講演の際にお配りした技術雑誌の中に「架ける」に掛けた一文がありますが、又この短い中で何処まで書けるか試してみる事にします。今も手元にあるその年さいきょう会の昔さんから頂いた文集も「架ける橋」でした。今年の1月、埼大建設30周年のとき配った会の紹介パンフにも、「橋にかける仲間たち」とあります。

これらの「架ける」という言葉の響きから、何か元気づけられるようなものを感じる気がします。

国鉄に入って2年半の現場回り等の後、橋の設計に関わるようになって本四・埼大等45年が経ちました。人生を賭けるというような大それた気持ではありませんが、橋にどんな夢を描けるかを思いながら駆け続けてきたようなものでした。もっともその長いマラソンの速さも、今では若い方々の歩く速さにも及ばない遅い進みとなりましたが。

これまで多くの、また今でも橋に関わっていますが、どれもこれも気に懸かるものです。夢欠ける橋にならないようにというのが自戒です。

さいきょう会の昔さんが益々研鑽を積まれ、広く世に翔ける事を期待しています。

(顧問 田島 二郎)

30周年記念会に参加して

大学の門を出て16年、久々に入った埼大のキャンパスは施設は増えたものの、私が過ごした当時の面影がそこかしこにあり懐かしかった。当時はまだ木陰など期待できなかつたけやきの並木も、天を突くほどに枝を広げ、初夏にはきっと若いカップルの語らいを優しく包んでいることだろう。

成績もさほど優秀ではなく、覚えている人も、顔見知りの人もほとんどいないだろうと思って参加したので、講演が終わって後ろからM先生に声を掛けられ、嬉しかった。仕事も建設コンサルタントから一転二転し今は10人ほどの測量会社で測量設計の仕事を行っているが、若き日に思い描いた青雲の志はどこへ行ったのだろうか。

幾人かの同期生や顔見知りの先輩、初めてお会いした第一線で活躍している後輩の人達の話の伺い、呑気に田舎でくすぶっているだけではいけないなどの思いを新たにしたりした1日だった。

およそ土木家として、設計施工に携わるかぎり、地域住民に喜ばれ、環境と調和し、地域に溶け込むようなものを創造して行きたいと思う。

“橋”は初心者なのでよろしくお願いします。

(第12期 中島 正道)

新入社員考

私が新入社員だったのは5年前ですが、最近是新入社員を教育するような立場になりつつあり、非常に憂慮しているところです。なぜそれが憂慮すべきことであるかという、まず「自分もそろそろ若くないのかなあ」と思ってしまうことと、もう一つは最近では自分が新入社員だったころの気持ちをすでに忘れてしまっているということです。新入社員を見ていると「自分もこんな感じだったかなあ」などと思う今日このごろです。

ある人がある席で新入社員に対してこんな事を言いました。「君たちは社会人一年生でまだ何も分からないだろうから先輩たちにいろいろ教わって成長していきなさい。」私はひねくれているのか、どうもこういう言い方というのが気に入らないんです。なぜなら新入社員が何も知らないなんてことは絶対にないし、われわれ非新入社員も新入社員から教わることは多々あるのです。

最近新入社員が私の職場(現場)に来ていますが、どう扱ったものかと悩みながら憂鬱な日々を送っています。

(第23期 川口 徹)

私にとってのチェロ

“八重洲室内アンサンブル”…現在私が所属しているアマチュア弦楽合奏団の名称である。団が結成された翌年、東京勤務となった私は高校の後輩から誘われて入団して以来、途中広島、神戸勤務の5年間を含め17年間チェロパートを守っている。損保会社の有志で結成された合奏団だが、現在の団員は様々な分野で活躍している老若男女12名。最盛期は20名程度で年1回の演奏会を行っていたが、結婚、転勤などで人が減り、最近ではもっぱら記念パーティーなどのB.G.M.出演で生計?を立てている。

しかし、今年は8月10日(土)に上野・奏楽堂でのビジネスマンコンサートへの参加が決まり、ホルスト作曲の「セントポール組曲」を練習している。土曜の午後から夜にかけての時間帯は、私にとって仕事を忘れ、音楽に熱中できる聖域である。更に今年は6月23日(日)に高校オーケストラ部の卒業生でつくられた“淡交フィルハーモニー管弦楽団”の団員として、ブラームス作曲の交響曲第3番などを演奏することになっており、こちらは日曜の夜が練習日。しばらくは忙しい土・日となる。

私にとってチェロは豊かな人生の愛すべき友である。

(第3期 軽部 信雄)

欧州の補修・補強技術の印象

土木構造物の補修補強の必要性がますます高まっている昨今、私がヨーロッパでの橋梁の補修補強の個別技術の現状を調査に訪れたのは、一昨年の9月であった。調査団の団長を日大の山崎教授にお願いし、総勢19名で、ドイツとフランス、ベルギー、スイスを訪問した。鋼橋の補修の仕事に就いている私にとって印象深かったのは、シュツットガルト大学のシュライヒ正教授のデザインした吊り形式構造物とケルン・ローデンキルヘン橋の拡幅工事であった。本橋は、アウトバーンに位置する中央径間378mの2面吊り形式の構造で、交通量の増加に伴い交通を供用したまま、原形と同じケーブルを1本併設し合計3本の構造に改築する。技術面では、交通の切り廻しに伴う各施工段階での細かな解析を行い、ケーブルの緊張可能な構造の採用と塔頂サドルの構造、新設横桁のヒンジ取付等の構造面と新旧路面の変位調整に配慮がなされていた。(詳細は、土木施工H7.7を参照ください) 調査を終えてみて、ヨーロッパ各国の補修補強に対する技術的な意識の高さとビールのうまさ印象に残る視察であった。

(第15期 細谷 均)

退官のご挨拶

去る3月、埼玉大学における定年を迎え、東京大学以来36年余勤めてきた国立大学を退官しました。埼玉大学における勤務は5年と短いものでしたが、学科長、評議員などいろいろな役目を仰せつかりました。しかし何よりも、さいきょう会を通じて、橋を共通の場とするOB、OGの方々と付き合えるようになったのは嬉しいことでした。

この後も、国内では鋼橋技術研究会や種々の委員会などの場で、少なからぬ皆様方と顔を合わせる機会があるでしょうし、さいきょう会の集まりにもお誘いがあれば、できるだけ参加させていただきたいと思えます。埼玉大学でも、今しばらく設計論の講義を非常勤講師として引き受けることになり、また来年からは私立大学に関係するかもしれません。

現在私の関与している委員会にポスト本四の海峡横断プロジェクトがあります。実際に手がけることになるのは若い皆様方でしょうが、これからの日本の橋はこれまでとは違った様々な制約を受けることになるでしょう。解決のための知恵を出して下さるのは皆さんです。いっそうのご研鑽と活躍を期待しております。

(顧問 伊藤 學)

わが国の切手で初めて描かれた橋



日光『神橋』



岩国『錦帯橋』



東京『レインボーブリッジ』

マニアであった父から受け継いで、趣味の切手収集を続けている。近年、郵便局員がすべての切手を認識しているのであろうか？と思うほど、頓に発行種類が増加してきている。その事も一因となり、一時期よりは熱も冷めてきている此の頃である。

さて日本では1871年の最初の切手以来、現在までに2700余種の切手が発行されている。そのうち、橋を図柄としたり、図柄の一部に橋が描かれている切手は40種を数える。

表題の橋は日光の『神橋』で、1938年に発行された国立公園切手に描かれている。この橋は1636年に建造されている。現在の橋は1905年に再建された橋長27m、幅員6mの朱塗りの木製アーチ橋である。因みに、この橋は岩国の錦帯橋、山梨の猿橋とともに『日本の三奇橋』に挙げられている。

なお2番目に描かれた橋は錦帯橋で、1946年に発行された通常切手に描かれている。

私が多少なりとも関わったレインボーブリッジが、ふるさとシリーズ切手の図柄になり1994年に発行されている。さいきょう会のメンバーが関わりをもった橋が次々と切手に描かれることを楽しみにしている。

(第1期 藤田 宏一)

高速道路も新時代へ

従来、高速道路を走行している場合に、ドライバーが交通情報を得る手段としては、情報板や各種ラジオ放送が主たるものでしたが、VICS(道路交通情報通信システム)であれば、リアルタイムに情報を入手でき、車内を高度情報化社会に相応しいインテリジェント空間に変える画期的なシステムと言えます。この情報入手には、VICS対応タイプの車載ディスプレイが必要ですが、情報活用によって渋滞を避けたり、最短時間ルートを選択することができます。また、渋滞緩和や、交通事故・道路公害の低減等、社会生活にも大きく寄与するものと期待されているところです。

この4月23日に、東京から100km程度までの首都高速道路を含む高速道路と、東名・名神高速道路等をサービスエリアとして情報提供を開始しましたが、順次大阪圏や名古屋圏にもサービスエリアを拡大する予定です。

本稿読者の皆様には畑違いのテーマだと思えますが、トピックスとして取り上げました。高速道路は、『くるま』だけでなく『情報』も運んでいるのです！(次は橋関係の執筆ができるカナ?)

(第16期 荒川 一成)

“繋げ”られないんで“掘って”ます

さいきょう会の皆様こんにちは、首都高速の桜井です。昭和58年の入社以来、主に“繋げる”方の仕事に携わって来ましたが、最近は“掘る”方ばかりやらされて(?)います。皆様もご存じの通り、都市内での橋梁建設は昨今非常に厳しい状況にあります。入社当時、首都高速道路のおよそ80%は高架構造でしたが、今後建設が予定されるその殆どがトンネル構造です。おかげで私もすっかりトンネル屋に宗旨替えです。

ところで、首都高速では最近新しい非開削トンネル工法の開発に着手しました。MMST(Multi-Micro Shield Tunneling)工法と言って、複数の小断面シールドを組み合わせてトンネル躯体外殻部を構築し、後からシールドに囲まれた内部断面を掘削するというもので、狭い地中空間に自由な形(矩形が可能)のかつ断面変化を有するトンネルの施工が可能(非常駐車帯等の拡幅も同時施工)であるという画期的な工法です。来年からは川崎の大師JCT予定地においての実証実験工事が本格化する予定です。興味のある方は是非見学にいらしていただきたいと思っています。

(第15期 桜井 順)

教科書を執筆する難しさ

「構造振動・制御」というタイトルの本を出版した。共立出版のテキストシリーズ土木工学の第8巻で。1996年5月20日のこと、ホヤホヤの出来立てである。今までは、研究成果を論文にしてジャーナルに投稿、査読を受けて掲載可となれば、お金を払って印刷・出版して頂いていたのが、本となると大違い。査読はない、読者が本を読んで下さるとお金が頂ける、等々。誠に妙な感じである。今となっては、本を買って頂いた方への責任だけは果たしていることを祈るのみ。教科書というのは厄介である。古典的学問に立脚する場合は特に難しい。基本的事項は入れつつも、数ある類似の教科書とは違うという、著者の主張が表われるべきと考える。この本の執筆依頼を受けたのはアジア工科大学院派遣中の1990年末のことで、実に5年半もの歳月が流れた。そのお陰か、構造振動工学と振動制御工学を分かり易く展開して繋ぐという「主張」はできたと思うのだが・・・。

ちなみに、建設力学・材料力学・構造力学の力学教育を担当している筆者には、埼玉大学で拙著を教科書として使用する機会は今の所ない。

(第7期 山口 宏樹)

写真解説

表題：鋼斜張橋とPC橋の結婚

この表紙写真は大阪市淀川の淀川に架かる「菅原城北大橋」の右岸部です。中央部は3径間連続鋼斜張橋で一面吊り、スリットを有する主塔構造といった特徴を持っています。一方、PC橋は料金所部のため幅員で巾が大きく変化するPC箱桁ラーメン橋でリブ付床版の採用が特徴です。施工法は場所打ちのカンチレバー工法。両側の歩道部はPC版の合成構造でスロープで下へ降りて来る構造となっています。そして、この橋の最も大きな構造上の特徴は鋼斜張橋とPCラーメン橋がスパン途中でヒンジにより連結されている事です。これは河川環境に配慮した橋脚位置といった設計上のねらいから採用された構造ですが、非常に珍しくこんな事もできるんだという驚きがありました。S63年当時、私はPC橋部の設計施工に携わり、橋が大好きな大阪市（企業者）、鋼橋メーカー等多くの人と苦楽を共にした事が懐かしく思い出されます。因みに、この鋼橋PC橋の結婚はヒンジ構造からしてPC橋が男でした。機会があったら見て下さい。

(第4期 本多 新)

STAR FERRY

日頃の罪滅ぼしということで、GWに家族を連れて香港へ行った。香港の中心は大陸側の九龍地区とビクトリア湾を隔て1km程南海上にある香港島である。この間は海底トンネル、地下鉄で結ばれているためか1つの橋も架かっていない。橋屋としては、このスパンを目の当たりにすると、はてさてここにはどういう橋を架けようかしらなどどつつい考えてしまったりする。海上にはStar Ferryという船が3～5分おきに両間を行き来している。これがすごくいい。料金わずか2HK\$ (約30円)、所要時間5分は1等(上層)と2等(下層)に分かれているのだがほとんど差はない。利用客もビジネスマン、観光客、地元の人と多様である。船上からは香港の高層ビル群が一望でき、夜景ともなるとその美しさは格別である。それにもまして船上は、この街の湧き出る激しい人の流れと、妙に甲高い声の広東語が飛び交う雑踏から抜けだせる貴重な時間と場所を与えてくれる。船内を吹き抜ける海風に心地良さを感じながら、もしここに橋が架かっていたらおそらくこの船もなくなるであろう事を考えると、ここにだけは橋が架からないことを強く望まざるを得なかった。

(第18期 花島 崇)



事務局からのお知らせ

今年で『さいきょう会』は10周年を迎えることになり、新企画として本会報を発刊することとなりました。積極的な写真や原稿の応募をお待ちしております。応募&新規会員の申込先は下記のさいきょう会事務局まで。

編集後記

会報の構成は、先生といえども事務局預かりということでランダムに配置致しましたが、田島先生の“かける”には、座布団一枚差し上げたくなり、見事第一欄にレイアウトさせて頂きました。皆さまの第一欄を目指した投稿をお待ちしております。

(第18期 岡安)

さいきょう会事務局代表

栗本鐵工所 橋梁設計部

東京設計課 赤尾 圭二

TEL 03-3436-8311 FAX 03-3436-8135

無断転載を禁じます。

9607200